

(口語訳) ここまで来ると、郷里長安と全く異なることを正に感得し、土地の産物も全く異なることがしみじみ分かった。土語はベチャクチャと言うばかりでさっぱり分からず、土人のしぐさは笑いまでぎこちない。水辺の市場がそのまま市街地に連なり、もやに煙る村落に沢山の船が入り込んでいて、役人は誰からも漁師税を徴収し、住民は誰も彼も焼畑税を納めている。

おそらく道真の頭の中では、京とあまりに文化的落差のある太宰府での日々の生活が、この白居易の「東南行一百韻」のそれと重なったに違いない。

道真の『菅家文草』「266 江上晩秋」に「鷗鳥従将天性狎、鱸魚妄被土風羞」の句が、また『菅家後集』「486 奥州藤使君」に「土風絶布悪、殷勤責細美」の句が見えるのはその投影だと思われる。

補説②

○72句目「布」についての考察

▼栲(こう)の皮をつかった布(ゆふ・ゆう・木綿)について

① たえ。梶の木の皮の繊維で織った白色の布。

「白栲(しろたえ)」「和栲(にぎたえ)」(『漢語林』)

② 司馬遼太郎氏の『街道をゆく』によると、『豊後國・風土記』「速水郡」に、「此ノ郷ノ中ニ栲(楮ノ一種)ノ樹多ニ生イタリ常ニ栲ノ皮ヲ取りテ木綿ヲ造ル因リテ柚富ノ郷ト言ウ」の一文が見える。

③ 其の昔九州にはゆふ(木綿)と言う布が有り栲(こう)栲(たえ、たく)の皮を用いて縄・紙・布を造ったとの話がある。(『漢辞海』)

(諸田 素子)